



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 238号 2011.1.19 発行 社会政策研究所

=====

このところ紙面構成上、末尾におなじみのつなぐちゃんマークが入れられず、ちょっと窮屈な事態が続きました。内閣改造があり、新閣僚は1月24日からの国会に向けて猛勉強中というところでしょうか。しばらく政府からの情報は少なめでした。地方も地方で4月の統一地方選挙に向けた態勢固めに力がそそがれています。

本日は、各紙やテレビ・週刊誌などでも取り上げられる「タイガーマスク運動」。知的障害に関する事件や事故、そして、ちょっとホッとする話題などをお届けします。【kobi】

主張：タイガーマスク 心温まる日本人の優しさ

産経新聞 2011年1月19日

漫画「タイガーマスク」の主人公を名乗る児童福祉施設などへの寄付が今も相次いでいる。

最初は昨年のクリスマスに、前橋市の児童相談所前に「伊達直人」がランドセル10個を置いた。年が明けると、その輪は全国に広がった。こうした心温まる善意のうねりは、日本人が誇ってよい奥ゆかしさと心根の優しさを示しているといえないが。

「タイガーマスク」は昭和45年前後に少年誌に連載され、アニメ化もされた。当時10歳前後だった少年が今の50歳代となる。虎のマスクをかぶったプロレスラー、伊達直人は、出身の「孤児院」にファイトマネーを贈り続けた。マスクは匿名の象徴でもあった。

一連の寄付には、自己満足のための偽善の押し売りではないかなどとする声もある。しかし今のところ、心配されるようなトラブルは聞かれない。物を置いていくだけではなく、双方向の継続的交流が必要だとする問題提起もあるが、まず大切なのは、そこに喜び子供の笑顔があることだ。

8日の全国高校ラグビー決勝は、前半に走り回った桐蔭学園（神奈川）を、東福岡（福岡）が後半押しまくり、結局、31 - 31で両校が優勝を分け合った。

閉会式で、ノーサイドの笛を吹いた麻生彰久主審に両校の主将が小箱を持って歩み寄った。2歳になる麻生主審の長男、修希ちゃんが重い心臓病と闘い、米国での移植手術に向けて寄付を募っていることを知った両校関係者が集めた募金箱だった。

この正月、心を熱くさせたうれしいニュースだった。昨年10月末に始めた募金は、報道だけで1500万円を超えた。総額も目標の1億5千万円に達し、2月に渡米を予定している。福岡市の「修ちゃんを救う会」によれば、ここにも「伊達直人」名義の募金があったという。

タイガーマスク1号がクリスマスの前橋市なら、2号は元日の神奈川県小田原市だった。「タイガーマスク運動が続くといいですね」と記された添え書きが後続を呼んだ。「矢吹丈」「肝っ玉かあさん」「桃太郎」といった仮名の広がり、贈り主の世代の拡大を示すものもあるのだろう。

「運動」への参加に手を挙げる企業も出てきた。中国でも大きく報じられた。どこまでも、いつまでも広がれ、と願う。

### 障害理解せぬ判決繰り返すな

強制わいせつの被害を訴えた宮崎県在住の知的障害者の女性（30）について、知的障害を理由に検察官の起訴を無効と判断した判決が昨年末、福岡高裁宮崎支部で破棄された。「被害者は、供述調書と告訴状の違いを説明できない」。そんな理由で被害者の訴えを門前払いした1審のような判決がなぜ出てしまったのか。私は関係者の話を聞いて回り、障害者に対する司法の理解不足と、「司法過疎地域」の問題を強く感じた。

### 告訴能力否定し1審は起訴無効

この裁判は、飯干広幸被告（61）が09年2月、被害女性を誘い出して車に乗せ、わいせつな行為をしたとして起訴された。宮崎地裁延岡支部は同年9月、検察官の起訴を無効とする判決を出した。

3カ月前、法廷に被害女性を呼んだ尋問で、裁判官は、事件後、警察官などに事情を聴かれて作られた「供述調書」と「告訴状」の意味の違いを女性に尋ねた。口調はやさしくとも、障害への配慮は感じられない抽象的な質問だ。女性は説明できず、結局、判決は「告訴で生じる利害得失も理解できない」などとして、女性の「告訴能力」（被害を訴える力）を否定した。

告訴状と供述調書の違いを即座に説明できる人がどれだけいるだろう。そんな理由で知的障害者を排除するのが正しい司法のあり方なのか。そんな思いから、事件の周辺取材を始めた。

事件当時、女性は宮崎市から車で3時間以上かかる山間地に住んでいた。人見知りでも親しくない人には話をしないが、記憶力はよく、事件の1週間後に被害現場まで警察官を案内した。通っていた福祉作業所の職員はそんな話をしてくれた。周囲の誰もが女性の訴えを疑っていないことが印象的だった。

女性の父親は、被害に遭いながら「訴える力もない」と判定された無念さを語った。「裁判所には従わなくてはならないが……」と、言葉を詰まらせた暗い表情が忘れられない。自宅は、最も近い弁護士事務所まで車で数時間かかる司法過疎地域にある。法律的な相談をできる専門家は皆無だ。被害を届け出れば周囲に知れると恐れたが、家族は「黙っていればまた被害に遭う」と悩み抜いた末、告訴を決めた。

同時に、容疑者と離すため、女性を遠い入所型施設に移さねばならなかった。作業所では、畑で育てた野菜を売り、わずかなお金を得る生活だったが、事件さえなければ生まれた土地で仲間と過ごせたのに、と父親は悔しがった。

知的障害者の証言が認められず、立件されなかったり被告が無罪になったりする事件は後を絶たない。例えば千葉県で知的障害がある少女にわいせつな行為をしたとされた教諭について、東京高裁は06年、「被害を受けたとの証言は疑問を差し挟む余地がない」としつつ、日時や場所の特定が足りないとして無罪にしている。

この事件では障害に詳しい弁護団や約100人の支援者が被害者家族を支えたが、宮崎の事件は、弁護士に相談することなど思いもよらない地区で暮らし、支援者もごくわずかだった。事件後に心ない中傷を受けても、ひっそり暮らす以外になかった。

知的障害者が性犯罪の被害に遭った場合、検察側は親などを代理人に立てて訴えることが多いが、今回の事件で検察側は女性本人の告訴しか取らなかった。公判の雲行きが怪しくなってから、1審途中で父親の告訴を取り弁論終了後に提出しようとして、裁判所に却下された。

「1審判決の言う通りなら、障害者は泣き寝入りだ」。宮崎地検のある関係者はそう憤った。同時に、「まさか成人女性の告訴能力を否定するとは」とも語った。検察側の真剣さを疑うものではないが、経験不足を感じざるを得なかった。1審の裁判官も障害者への理解

不足という点では同じだと思う。

### 心理学専門家の支援なども重要

英米などには、心理学の専門家らが事件に遭った障害者や子どもなどから被害状況を聞き、証言の信用性を判断する「司法面接」という仕組みがあるという。日本では罪を重ねる知的障害者について、司法と福祉が連携する取り組みが始まっているが、被害者になった場合の対処はまだ不十分だ。

「誰に話しても聞いてもらえないと思っていた。でも、これからは泣き寝入りはやめようと思う。2審判決後、女性がかつて通っていた作業所に、知的障害の子を持つ母親から、虐待被害をほのめかす電話があった。「きっと障害者の訴えを聞いてくれる社会になるはず。頑張りましょう」。職員はそう励ましたそう。私もそんな社会にしなければと思う。(宮崎支局)

### 現場発：安全 施設側まかせ

#### 電動窓で障害児重体 それでも家族には大切な場所 送迎付き少なく

毎日新聞 2011年1月19日



首などを挟む事故が絶えない車の電動窓。指先の部分にスイッチがある(記事と写真の車は関係ありません)

長崎市で昨年4月、障害児預かり施設の送迎車内で、男児(8)がパワーウィンドー(電動窓)に首を挟まれ意識不明の重体になった事故。長崎県警稲佐署は18日、車内の安全注意義務を怠ったとして、運転していた長崎市の預かり施設「どれみハウス」の女性元職員(26)を自動車運転過失傷害容疑で長崎地検に書類送検した。事故の背景には、障害児らを抱える家庭に必要な不可欠な施設なのに、安全対策が施設側まかせの実情があった。【釣田祐喜】

「(施設側を)責める気にはなれない。送迎付きで預けられる先は少ないから」

長男(11)が、09年6月からどれみハウスの障害児預かりサービスを利用しているという同県西海市の主婦(39)はこう話し、戸惑った。

障害児預かりサービスは、障害者自立支援法に基づく「日中一時支援」。自治体が厚生労働省の補助金を使って施設に委託する事業で、06年度始まった。どれみハウスでは、08年度からNPO法人が事業を始め、現在は障害児約30人が午前8時半から午後6時まで利用。希望者を有料で送迎している。

主婦の長男は自閉症があり、思い通りにいかないことがあると、言葉で表現できずにパニックに陥る。主婦は自宅では長男にかかりきりにならざるを得ず、片道40分かかる特別支援学校への送迎もある。気がめいって「長男を殺して死のうか」と思ったこともあるという。そんな苦しみを軽減してくれたのが、預かりに積極的などれみハウスだった。

昨年4月10日の事故当時、送迎車に乗っていたのは、女性元職員1人と障害のある子供3人。長崎市の福祉関係者は「人とのコミュニケーションや周囲の状況把握が苦手で、唐突な行動を取りやすい子も多い。運転手1人での送迎は考えられない」と指摘する。

障害児らを抱える家庭にとって、不可欠といえる預かり施設や送迎サービス。それだけに、県警も慎重に捜査した。ある捜査幹部は「施設がなくなれば困るご家族がたくさんいる。ただ、過失があれば立件せざるを得ない。安全面の警鐘は鳴らさなければいけない」と話した。

電動窓を巡る事故は、スイッチ操作の判断ができない幼児や児童が多い。国民生活センターによると、05～09年度に起きた指挟みなど事故23件のうち、16件が10歳未

満だった。

にもかかわらず、障害児の送迎に関する安全基準すら国、自治体ともにまだない。長崎市の担当者は「事業参入を促すためには、施設側に厳格な規則を課しづらい現状がある」と事情を指摘した。

## ミカンの皮むき最盛期 周防大島の授産施設

朝日新聞 2011年1月18日

ひたすらミカンの皮をむく利用者たち＝周防大島町西屋代の知的障害者通所授産施設さつき園

県内最大のミカン産地、周防大島で、缶詰用ミカンの皮むき作業がピークを迎えている。加工場から委託された近くの福祉施設などの利用者らが、1個1個丁寧にひたすら皮をむいていた。

周防大島町久賀のJA全農やまぐち久賀加工場はこの時期、連日25～30トンのミカン缶詰に加工している。薄皮は薬品で溶かすが、外皮は手作業でむくので、大半は近くの農家や福祉施設などに委託する。



その一つ、知的障害者通所授産施設さつき園では、「ミカン班」の約20人が毎日700～900キロのミカンの皮をむく。傷や汚れが付かないよう細心の注意を払っている。むいた分はトラックで久賀加工場へ毎夕運び、翌日分のミカンを預かる。

「だれでも自分のペースでできるし、危なくない。むいたミカンの箱がどんどん積み上がるので達成感があります」と古川英希園長。収入源としても大きいという。

久賀加工場では今期、2月までに1600トン分の缶詰加工を見込んでいる。(渡辺純子)

## 今後の全国規模の各種会議等の予定

- 1月18日 全社協「第4回障害関係種別協議会等会長会議」
- 1月20日 厚生労働省「第9回今後の介護人材養成の在り方に関する検討会」
- 1月20～21日 厚生労働省「平成23年度厚生労働関係部局長会議」
- 1月25日 厚生労働省「第11回障がい者制度改革推進会議総合福祉部会」
- 1月28日 全社協「都道府県・指定都市社協 常務理事・事務局長セミナー」
- 1月31日 内閣府「第2回障がい者制度改革推進会議 差別禁止部会」
- 2月4・5日 全日本育成会 第12回地域活動・就労支援事業所協議会全国大会
- 2月4～6日 アメニティフォーラム15
- 2月15日 厚生労働省「第12回障がい者制度改革推進会議総合福祉部会」
- 2月25日 全社協「第6回権利擁護・虐待防止セミナー」

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行